

第13回 あの森を訪ねて

＝小網代の森から新井城跡と海岸歩き＝



はじめに

今回は、平成26年7月に一般開放された小網代の森と近傍の史跡を訪ね、三浦半島の海岸も歩く。

コースは、京浜急行「三崎口駅」～引橋～小網代の森～白髭神社～三浦道寸墓～銅網海岸～荒井浜～東大臨海実験所～油壺湾遠望～新井城址～三崎口駅。約7 km。

三崎口駅から引橋まではバスもある。時間があれば、近くはないがそう遠い距離でもないので、台地上に広がる野菜畑を渡ってくる風に吹かれて歩くのがよい。

ここ三浦半島南部は、県内で有数の農業地帯で専業農家も多く、その経営面積も広い。

冬から春は大根とキャベツ、夏はスイカやメロンなどが作られる。大根とキャベツは全国的な大産地。

土地の利用形態は、台地の上が農地で、農地と海の間急斜面が樹林地として残され、その中の川沿いの平地には水田が造られた。

小網代の森は、まさにこのとおりの形態となっている。



引橋

引橋地区が小網代の森の入り口。引橋とは奇妙な地名である。これは後に尋ねる新井城に関係した名前。ここは城の大手門にあたり、橋を外すと敵の侵入を防ぐことができるという天然の要害の地であった所。引橋は外と内2つあった。

小網代の森

人家のはずれの急な坂をくだる。ここから海までは人家も車道もない。森には水源から海まで約1.2 kmの「浦の川」流域の自然がそのままある。

今から50年ほど前に市街化区域に編入され、ゴルフ場の開設が計画された。その後、紆余曲折あるも、この貴重な自然を保全するために、行政、土地所有者、そして環境保全団体などの連携・協力・活動により開発はまぬがれた。

森の面積は70 ha。県による取得が平成22年に完了した。

森に入る

森の入り口「引橋入口」は標高47.9 m。ここから海につながる河口まで千数百mの木道が県によってつくられている。

木製風のもので、老若男女誰でも安全で快適な歩きを楽しめる。

流域にはアカテガニを始めとして動植物が約2千種とのこと。

アカイノデ（シダ）の群落と樹林を抜け、入口から600 m程で湿地にハンノキやジャヤナギが生



えている「まんなかの湿地」。そして、更に明るく開放的な湿地の中を歩き、八角形のヤナギテラスを過ぎ、河口近くのエノキテラスに着くと木道は終り、その先はカニが顔を出す干潟から海へと続く。



湿地は、昭和45年頃まで水田があった所。水田として使用されなくなり乾燥化が進みササヤブ化していたものを水田時代のような湿地とするために様々な工夫と作業により復元したもの。その苦勞は並大抵ではなかったであろう。自然につつまれながらゆっくりと歩いて河口まで1時間ほど。

それにしても、広大な土地の取得、散策路の整備、湿地の復元・維持、森林の保育等と多大な経費

と労力が投じられていることは想像に難くない。気候温暖なこの地、今後とも継続した活動がなければ、自然の遷移にのみこまれて、今の姿を維持するのは困難であろう。

カンカン石



森を出て海岸近くの白髭神社による。社殿のそばにある細長い石を叩くとカンカンと甲高い金属音がする。カンカン石や讃岐石等と呼ばれる緻密な安山岩。西日本に産し石器にも利用された。この石は船の錨に使われたとのこと。

湾口500m、奥行き約1200mの小網代湾の海とヨット、漁船などを見ながらしばらく歩き、シーボニアマリーナの手前から台地の上へ。バス通りに出て右手にしばらく行くと油壺のバス停。

帰りは、ここからバスで三崎口駅に向う。

そして、この付近が新井城の首根っこで「内の引橋」のあった所。

新井城跡

道の突き当りは「京急油壺マリパーク」。昭和43（1968）に開園した遊園地。

ここには、戦前は海軍潜水学校、戦後は県立三崎水産高校があった。

そして、更に遡った戦国時代には三浦氏の新井城のあったところ。

城は、三方を海に落ち込む切り立った崖に囲まれ、唯一の陸地に通じる「内の引橋」を外せば、容易に攻め込まれないという難攻不落の地にあった。

鎌倉幕府の成立や政権運営の重鎮としての有力御家人であった三浦氏本家は、宝治合戦で滅ぼされたが、支族が三浦半島南部に残った。それから270年後、今度は北条早雲に攻められ、3年間持ちこたえたが永正13年（1516）に落城し、三浦一族は滅亡した。

最後の城主三浦道寸の辞世の句「討つ者も 討たるる者も かわらけよ ぐだけて後は もとの土くれ」。

急な坂を下り、道寸の墓に立ち寄り、砂浜の広がる銅網海岸へ。

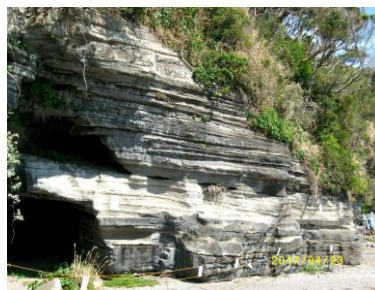


こぢんまりとした静かな浜で、遠くにシシーボニアの建物群とその向こうに小網代の森が見える。

海岸ウォーキング

三浦半島南部の相模湾側は複雑な地形となっている。この付近は、北から小網代湾、油壺湾、諸磯湾と連なる典型的な溺れ谷によるリアス式海岸。地層や整合など興味深い景観が続く。

この浜から短い海岸沿いのウォーキング。途中関東大震災で隆起した海食台を過ぎ、白と黒の横縞模様が美しい崖の地層を眺めながらゆくと荒井浜。かつて遊覧船が



就航していた時の栈橋の残骸がみえ、浜には海の家もある

東京大学臨海実験所

荒井浜を取り囲むように東大の施設が点在している。臨海実験所は明治19年（1886）我が国最初の臨海実験所として開設された。年間2.5万人の研究者や実習生が訪れると建物そばの説明版にある。タブノキやモチノキ、トベラ、マテバシイなどに木が目につく。台地の上に通じる道を行くと景勝50選の碑や句碑のある所にでる。

景勝50選地碑（油壺湾遠望）

木間越しの眼下に多数のヨットが係留されている油壺湾が見える。

入り込んだ湾で、見るからに油を流したような静かな海が広がっている。なるほど油壺か。

とって近く市の説明版を読むとそんな生易しいものではない。

それによれば、新井城が落城するさい将兵の血汐で湾が油を流したようになったことから、後世こう呼ばれるようになったとある。

かわらけの凄惨な戦いに絶句。



すぐ近くに新井城の説明版がある。城址を示す空堀や土塁があると書いてあるが、柵の外から空堀らしき地形がみられるだけ。今まで歩いてきた地形などから想像するしかない。

ここから油壺のバス停までは、ほんの少しの距離。バスに乗り渋滞がなければ約15分で三崎口駅。

(2017.5 瀧澤)